

- 38 中村哲郎「鈴木泉三郎『次郎吉備梅』(『歌舞伎の近代』岩波書店 2006年)セジウィック、イヴ・コゾフスキー『男闘士の絆―イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年)
- 39 菅野聡美『消費される恋愛論―対象知識人と性』(青弓社 2001年)、デビッド・ノッター『純潔の近代 近代家族と親密性の比較社会学』(慶応義塾大学出版局 2007年)、田中亜以子『男たち/女たちの恋愛 近代日本の「自己」とジェンダー』(勁草書房 2019年)、高橋幸、永田夏来編『恋愛社会学 多様化する親密な関係に接近する』(ナカニシヤ出版 2024年)参照。
- 40 宇野信夫「生きている小平次」の思い出(『九月興行大歌舞伎 尾上菊五郎劇団』公演プログラム 明治座 1954年9月)
- 41 岡栄一郎「批判」生きている小平次「三幕」(『演劇画報』(1925年7月)
- 42 戸板康二「解説」(『現代日本文学全集』92 筑摩書房 1958年)
- 43 注25掲載の草稿「藤沢清造君の月評に」より引用。
- 44 神山彰「大正期の南北受容」(『大正演劇研究』4 1993年4月)
- 45 注42に同じ。
- 46 一柳廣孝『怪異の表象空間 メディア・オカルト・サブカルチャー』国書刊行会 2020年)
- 47 東雅夫『なぜ怪談は百年ごと流行るのか』(学研新書 2011年)
- 48 劇団青年座による鶴屋南北作「盟三五大切」の上演(1969年6月、石沢秀二演出)など。
- 49 注27に同じ。

## 研究論文

# 松尾祭の掛け声「ほいっと」に関する基礎的研究

野村 朋弘

## はじめに

京都の三大祭りといえば、賀茂社の葵祭、八坂神社の祇園祭、平安神宮の時代祭だろう。多くの観光客で賑わう。筆頭にあげた賀茂社の葵祭は毎年五月十五日に行われ、京都の春の祭礼の代表といえるだろう。葵桂を飾った装束での行列が著名であり、平安時代から貴族や民衆が見物に訪れた。しかし京都において葵祭といえば、もう一つ行われている。それが洛西の古社である松尾大社の松尾祭である。松尾祭は、神幸祭と還幸祭からなり、洛西で最も大規模な祭礼といってもよい。この祭礼は松尾大社から洛中の御旅所まで神輿六基と長櫃一基が巡幸するもので、神社を信仰する氏子達を中心となつて実施されている。この祭礼の掛け声は「ほいっと、ほいっと」という京都独自のもので、他の地域ではみられないものだ。神社祭礼を考えると、笛・鉦・太鼓などによる囃子の研究はあるものの、リズムのある掛け声の研究は極めて少ない。今回は京都独自に発展してきた「ほいっと」の掛け声について、発祥の祭礼といわれている松尾祭をとりあげ基礎的な調査を実施した。本稿ではそれらの調査報告をまとめつつ、「ほいっと」という神社祭礼の掛け声研究のとはぐちとしたい。

## 一、松尾大社

まずは松尾大社についての概観を述べる。松尾大社は京都市西京区に鎮座する古社であり、大山咋神と市杵鳥

姫命を祭神として祀る神社である。その起源は古く平安京に遷都される以前の大宝元年(七〇一)に、渡来系氏族である秦忌寸都理が現在の場所に社殿を創建したことに始まる。この創建以前においても、松尾山(別雷山や分土山とも称される)は大山咋神が鎮座する神奈備として信仰されており、その山中にある大杉谷の磐座で祭祀が行われていたという淵源を持つ。『古事記』には大山咋神が近江国の日枝山と共に葛野の松尾に坐し「鳴鏑を用つ神」であると記されていることから、古くからこの地で信仰されていたことがわかる。

松尾大社は平安京の遷都以降、都の西の守護神として朝廷から篤い崇敬を受けることとなった。これは都の東に位置する賀茂神社(下鴨・上賀茂神社)と対をなすものであり、「賀茂の厳神、松尾の猛霊」と並び称され、王城鎮護の社として位置づけられたのである。平安時代中期以降、国家の大事に際して朝廷から幣帛が奉られる二十二社の制度が確立すると、松尾社はその中でも「伊勢、石清水、賀茂」に次ぐ四番目の「上七社」の一つに列せられた。また、延喜式の神名帳においても名神大社として記載されており、月次・相嘗・新嘗の祭りに際しては案上官幣に預かる格式を誇った。清少納言が『枕草子』において「神は松の尾」と記したことや、一条天皇をはじめとする歴代天皇が行幸を行ったことから、その尊崇の篤さが窺える。

また、松尾大社は「酒の神」としても広く知られている。これは社記に「此の地の穀物を採り、御山の杉谷の水を以て、優良なる酒を得給ひし」とあるように、醸造の祖神として崇敬されてきたことに由来する。松尾山から湧き出る水(亀の井)を酒に混ぜると腐敗しないという伝承もあり、酒造家からの信仰を集めてきた。江戸時代の地誌『雍州府志』には「酒徳神」として酒を醸す者から尊崇されている旨が記されており、境内には酒造家から寄進された多くの石灯籠が現存している。ただし、江戸時代前期の『神道名目類聚抄』などでは酒造の神を梅宮大社の祭神とする説も見られ、松尾大社が酒造神としての地位を不動のものとしたのは、江戸時代後期から明

治・大正期にかけてのことであったと考えられる。

松尾大社の歴史を語る上で欠かせないのが、同社に伝来する膨大な史料群である。松尾大社には約二〇〇〇点に及ぶ古文書や記録類が所蔵されており、これらは『松尾大社史料集』として編纂・刊行されている。この史料群には嘉応三年(一一七二)の「池田荘立券文案」をはじめとして、平安時代から近代に至るまでの文書が含まれており、神事や所領経営、社家の動向を知る上で極めて貴重なものである。これらの史料が今日まで散佚せず伝えられた背景には、社家である秦氏(東家・南家)の存在が大きい。松尾社の祠官は代々秦氏が務めてきたが、中世以降、東家と南家に分かれ、それぞれが神主や禰宜といった職を世襲してきた。特に東家は、近世においても社家の嫡流として文書を管理し、明治維新後の変革期にもその散佚を防ぐ役割を果たしたと考えられる。また古代から中世にかけて神社の経営基盤を支えたのは、各地に点在する社領荘園であった。史料によれば、山城国菱川荘、丹波国桑田荘・雀部荘、三河国設楽荘、遠江国池田荘、越中国松永荘、摂津国山本荘、伯耆国東郷荘など、広範囲にわたる所領を有していた。なかでも丹波国の雀部荘は、松尾社の根本所領ともいえるべき重要な荘園であった。雀部荘は寛治五年(一〇九二)に丹波兼定が寄進したことに始まり、後に松尾社司によって立荘されたものである。この荘園からは日々の神供となる川魚などが納められており、「当社毎日供業所」として機能していた。鎌倉時代には地頭による押領や非法に対し、松尾社が幕府に訴えを起し六波羅探題からの裁許を得て支配を維持しようとした記録も残されている。中世の動乱期、特に応仁の乱以降は遠隔地の所領の維持が困難となり、神事の遂行にも支障をきたすようになったが、織田信長や豊臣秀吉といった天下人によって社領の安堵や寄進が行われた。豊臣秀吉からは本社九三三石の朱印地が認められ、これは江戸幕府にも継承されて近世の松尾大社の経済的基盤となったのである。

このように松尾大社は古代から続く王城鎮護の社としての格式を持ち、秦氏という渡来系氏族によって支えられ、豊富な史料と所領を有してきた神社といえよう。

## 二、松尾祭

松尾大社で執り行われる祭祀の中で最も代表的かつ規模の大きなものが、毎年四月と五月に行われる「松尾祭」である。<sup>10</sup>この祭りは松尾七社（松尾社・月読社・櫛谷社・三宮社・宗像社・衣手社・四大神）の神輿と唐櫃が、桂川を渡り洛中の御旅所へと巡幸するものである。松尾大社は京都市内の三分の一にも及ぶ広大な氏子区域を有する。地元の人々からは神幸祭を「おいで」、還幸祭を「おかえり」と親しみを込めて呼ばれている。また、平安時代から「松尾の国祭」とも称され、還幸祭の供奉者が葵・桂をかざすことから「松尾の葵祭」とも呼ばれるなど、京都の祭祀文化において重要な位置を占めている。<sup>11</sup>

松尾祭の構造は、大きく分けて二つの要素から成り立っている。一つは本社において行われる祭祀でありもう一つは神輿が御旅所へと渡御する神幸・還幸の儀式である。<sup>12</sup>本社での祭祀は古くは「勅祭」として執り行われていた。勅祭とは天皇の使いである勅使が神社に参向し、幣帛を奉る儀式のことである。「延喜式」や「儀式」といった平安時代の法典には、松尾祭に際して山城国司や郡司が騎兵を率いて参候したことが記されており、これが「国祭」と呼ばれる所以であると考えられる。祭祀の創始については詳らかではないが、『本朝月令』や『東寺王代記』などの記述によれば、承和年間（八三四～八四八）に始まったとされている。平安時代には四月の中の申の日に行われるのが通例であり、内蔵寮や大膳寮などから幣物が支出されていた。

しかしこの勅祭としての松尾祭は、中世に入ると大きな変容を余儀なくされる。南北朝時代の動乱期、特に文和四年（一三五九）頃から、朝廷の衰微や戦乱の影響により勅使の派遣が困難となり、祭祀を「社家に付す」という事態が常態化していく。『園太暦』文和四年四月二十九日の条には「松尾祭被付社家云々」とあり、勅使が参向せず、社家の手によって祭祀が行われたことが記されている。その後、室町時代においても「近例」として社家に付されることが多くなり、応仁・文明の乱を経て、勅祭としては中絶するに至った。

勅祭が途絶えた後も社家たちはその復興を願い続け、近世を通じて再興への働きかけが行われた。その悲願が達成されたのは、幕末の慶応二年（一八六六）のことである。この時期、異国船の来航などにより国内の緊張が高まる中、朝廷は「夷狄来船、人心不和、皇国安危」を憂い、国家安泰を祈願するために松尾祭を勅祭として再興することを決定したのである。孝明天皇の宣命には、承和の御代に始まり中古に廃絶した祭祀を、時局の困難に際して神明の冥助を仰ぐために再興する旨が記されている。<sup>13</sup>

一方、神輿が氏子地域を巡る神幸・還幸は、御旅所祭祀として独自の発展を遂げてきた。御旅所の存在が確認できるのは院政期からであり、神輿は桂川を渡り西七条の御旅所へと向かう。特に神幸祭では、桂川を船で渡る「船渡御」が中世の段階から行われており、いわば、神幸祭の大きな見せ場であった。神幸祭（おいで）では、松尾大社を出発した神輿が桂川を渡り、七条通を東へ進んで西七条の御旅所（および衣手社、三宮社）に着御する。そして三週間ほどの滞在の後、還幸祭（おかえり）において本社へと戻るのである。還幸祭において特筆すべきは、神輿がかつての官寺である西寺の跡地（旭の杜）で御供を受ける儀式である。ここでは赤飯座による特殊神饌などが供えられる。岡田莊司の研究によれば、稲荷社が東寺の鎮守神であるのに対し、松尾社は西寺の鎮守神であったとされ、この儀式はかつての両寺と両社の関係を今に伝えるものといえよう。

松尾祭の担い手については、鎌倉時代の史料である「弁官下文」（元久元年／一二〇四）に興味深い記述<sup>14</sup>があ

る。<sup>14</sup>それによれば、葛野郡内の「新加之座衆」と呼ばれる新しい住人たちが、松尾祭の神役（祭礼への奉仕義務）を拒否したため、祭礼の維持が困難になったという訴えがなされている。朝廷は松尾社の訴えを認め、祭礼が「葛野郡一郡之宮」であるとして、住人たちに神役の負担を命じた。これは松尾祭が単に神社だけの行事ではなく、地域社会全体で支えるべき「氏子の祭り」であったことを示している。現代においても、松尾祭は氏子たちの手によって維持・継承されている。特に「松尾七社」の神輿を担ぐ大宮社・櫛谷社・宗像社・三宮社・衣手社・四之社それぞれの青年会や、それらを束ねる「六社青年連合会」が祭礼の主役となっており、一年を通じて準備や打ち合わせを行い、祭りの運行を取り仕切っている。一時期、担ぎ手不足などにより船渡御が途絶えたこともあったが、氏子たちの尽力により復活し、昔ながらの巡行の姿を取り戻している。<sup>15</sup>祭礼は神と氏子、そして氏子同士を結びつける重要なコミュニケーションの場として機能しており、地域コミュニティの再生産にも寄与しているといえる。以上のように、松尾祭は古代からの勅祭という公的な側面と、地域住民による御旅所祭祀という民俗的な側面を併せ持ち、時代の変遷の中で形態を変えながらも、都の西の守護神としての威厳と、地域社会との深い結びつきを保ち続けてきたのである。中世における勅祭の中断と社家による維持、そして幕末における国家的な危機を背景とした勅祭の復興は、松尾祭が単なる宗教行事にとどまらず、日本の歴史や社会情勢と密接に関わってきたことを如実に物語っている。また、神幸・還幸における御旅所や西寺跡での儀礼、そして氏子たちによる祭礼の運営は、京都という都市の歴史的重層性と、そこに生きる人々の信仰の厚さを今に伝えている。

### 三、囃詞とついで「ほごっこ」

ここでは松尾祭から少し離れて神社祭礼の掛け声を含めた「囃詞」についての研究史を振り返ってみたい。神社祭礼に関する研究は民俗学の領域を中心として行われてきた。古くは柳田國男の「日本の祭」がある。<sup>16</sup>これは昭和十六年（一九四一）に講義として行われたものが翌年まとめられたもので、神事としての祭の歴史を「祭から祭礼」への変化などに注目して考察しているものだ。これよりさらに遡り、昭和七年（一九三二）に『民俗藝術』で中山太郎が「囃詞の研究」を発表している。これは神輿を昇く際の詞を総じて「囃詞」としてとらえ研究したもので、中山は文献資料を博搜して分析を加えている。また囃子そのものでいえば祇園囃子や佐原囃子といった楽器を用いた囃子がある。この囃子については、植木行宣らの『都市の祭礼―山・鉦・屋台と囃子―』があり、<sup>17</sup>民俗学と芸能史や音楽学の観点から研究が行われている。このプロジェクトのなかで福原敏男は「楽器ではなく、掛け声や音頭（歌謡）によって祭礼を囃す事例」として広島県の福山の事例を取り上げている。また京都の神輿昇きの観点でいえば西山剛の研究や、<sup>18</sup>中西仁の研究がある。特に中西は歴史民俗学の研究方法で神輿昇きについての分析を行っており、「京都標準の神輿の昇き方」などでは松尾祭を取り上げて考察している。これまでの先行研究を振り返ると、総じて京都での神輿を昇く際の掛け声である「はいっ」とそのものについての言及は極めて少ないといわざるを得ない。発生そのものが史料として遺されている訳ではないのが最大の課題である。念のため、現在「はいっ」との語源についてどのような言説があるのかを確認してみよう。大きくわけて次の三種類がある。

①「祝人（ほういと）」説

②「祝祝と（ほうほうと）」説

③「材木・労働歌」説

①は祇園祭の神輿会（三若会・四若会・錦神輿会など）による解説など、メディアで紹介される際に神輿会

の関係者が説明している説である。

②は祭礼のガイドなどで聞く説明で「言祝ぐ」行為によるとされる説である。「祝」は「いわう」のほか「ほう」と古語では読まれており、そうした言語学的な推測に基づいていると考えられる。

③は高瀬舟の船頭や、材木を切り出す人夫たちが、息を合わせるための掛け声として用いていた説である。神輿を早く輿丁たちの多くは人足や労働者が多く、呼吸を合わせるための実用的な掛け声としての「ほい」などが形式化されたという。

いずれの説も現代においてそれぞれの関連する人たちによって説明させているもので、例えば語源として正しいとしても、歴史的に根拠を求めることは難しい。

そこで近代以降の出版物で、「ほいっ」との掛け声についての記述がないかを調査した。監物恒夫の『神輿』で紹介されているものの、最も古いものは管見では山内隆の『京の祭 民謡集』にあるものと考えられる。<sup>20</sup>この本は、妍彩篇・葵祭篇・祇園会篇・牛祭篇と京都の祭を分類し、それらの祭で歌われているものを紹介している。

松尾祭は妍彩篇に収められており、桂川渡御、神輿唄として次に掲げる歌詞が紹介されている。

松尾 七社の 七社の ホイトサ ホイトサ

輝く御威勢を、御威勢を見よや

一に大宮神 二に四大神

三に衣手神 四に三の宮神

ホイト ホイト

ホイトサー

五に宗像神 六櫛谷神

七つ月読神 辛櫃さまか。

ソラ 揉め、もめ、もめ、揉みぬけ ホイトサ

ホイト ホイト ホイトサの輝くみ屋根

反りを、うたせて、金さらさらり

金の斜面に、みどりの反射よー

ソラ 揉め この意気

ホイト ホイト ホイトサ。

松尾 七社の、七社の、ホイトサ、ホイトサ、

輝く 御威勢に 御威勢に映えて

桂川瀬の 瀬の 瀬がひかる

ホイト、ホイト、ホイサの、

ソラもめ ホイトサ。

飛沫けたて、 渚でホイトサ

ホイトサで揉め込む素裸、素手

意気は松尾の 御神威にもえる。

ソラ差せ させ させ 神輿の 御船だ

敷た、いて ホイト ホイト ホイトサ

ホイトサと傾むきや 金きら 斜面  
ゆれて瓔珞 しぶきに 踊る―  
ホイトサのホイトサ  
ホイト ホイト ホイトサの  
ホイトサの水に―  
ぬれて輝く 葵の七社。

付記には「ほいとほいと」の掛声勇ましく次々に渡御される黄金の屋根の反り。飛沫に踊る瓔珞のさ、やき。実に金碧燦爛として瀬々に漲る崇高な御神威の歌声でなくて何であるふ」（漢字は旧漢字表記から新字表記に改めた）とある。

この歌にある「ホイト」こそ、促音である「っ」が表記されない当時の慣例を踏まえ、「ほいっ」とのことを指すといえよう。昭和九年（一九三四）の段階ではかの神輿で「ホイト」の表記はなく、例えば祇園会の「神輿の唄」には「あいな、あいな、あいな」と掛け声が記されている。松尾祭での掛け声が発祥である旨を次章で示す聞き取り調査の際に聞いていたが、この文献からも推測することができる。

文献調査を踏まえて令和七年（二〇二五）二月一九日に松尾祭の奉行を勤める井上義平氏への聞き取り調査を実施した。井上氏は調査の段階で八二歳、松尾大社の氏子圏のなかでも川勝寺のエリアの方である。川勝寺は、蜂岡寺とも呼ばれる秦河勝が経営した寺院の旧地といわれている。現在の京都市右京区西京極であり、近世は川勝寺村となっていた。村域に松尾三宮社があり、松尾祭のときの御旅所ともなっている。

井上氏は二〇歳前後に青年会へ入り三宮社の神輿を昇りてきた。神輿を昇きはじめてときはそれぞれの神輿会があったものの、連合組織はなかったという。それが昭和五二年（一九七七）に六社氏子青年会が組織された。松尾社の神輿のある大宮社・櫛谷社・宗像社・三宮社・衣手社・四之社の六社である。以降、松尾祭の実務を神社とともにこなしている。

掛け声について聞き取りをしたところ、「ほいっ」とは松尾祭で用いられていたものであり、松尾祭の昇き手が他の祭礼でも昇きにいき、伝播していったという。中西の「京都標準の神輿の昇き方」<sup>21</sup>では神輿の人員配置・体制の説明のほか、「見せ場では神輿を「もむ」という動き、すなわち「ほいっ」と等という掛け声とともに轎の前後に付けられた鳴鑼という金具を鳴らす動きも京都の神輿場ではよくみられる」<sup>22</sup>とし、松尾祭や稲荷祭からこの京都標準の神輿昇きが伝播したと指摘している。<sup>23</sup>

六社それぞれにリズムが多少ことなり、例えば衣手社はリズムが早いなどがあるという。また「ほいっ」とのほか「よい」となどの掛け声もあり、特に神輿昇きのリズムを修正する際には「ほいっ」ではなく、「よい、よい」と掛け声を出すという。

#### おわりに

本稿ではこれまで民俗学や芸能史の分野において、楽器を用いた囃子研究の陰に隠れ、学術的な検討対象として扱われることの少なかった神輿の「掛け声」に焦点を当て、特に京都の松尾祭における「ほいっ」とについて基礎的な調査を行った。

本研究の意義は以下の三点に集約される。第一に、文献調査において山内隆『京の祭 民謡集』を確認し、戦

前の段階で既に「ホイト(ほいっと)」という表記と歌詞が記録されていることを明らかにした点である。語源に関する諸説は口伝の域を出ないものが多いなか、少なくとも昭和初期には確固たる祭礼文化として定着していたという文献的根拠を提示できたことは重要である。第二に奉行の井上氏への聞き取り調査を通じ、松尾祭の現場において「ほいっと」が単一の掛け声として存在するのではなく、「よいと」等の修正の掛け声と組み合わせで運用される実践的な身体技法であることを確認できた点である。第三に先行研究および当事者の証言から、松尾祭が京都における神輿の「標準」的な昇き方や掛け声の伝播において、重要な発信源としての役割を果たしていた可能性を提示できた点である。「ほいっと」という掛け声は単なる音響ではなく、神と人、あるいは担ぎ手同士の呼吸を合わせ、地域社会の結合を確認するための不可欠な祭祀要素である。今後はこの調査結果をベースとして六社氏子青年会それぞれから掛け声に関する聞き取り調査を行っていく予定である。京都の伝統芸能の一つとして神社祭礼もあげられる。こうした基礎研究を進めていくことには意義があるだろう。本稿が今後より広範な比較研究が待たれる「掛け声」研究の端緒となれば幸いである。

#### — 注釈 —

- 1 『古事記』大國主神段。
- 2 松尾大社を含めた古代・中世の二十二社体制については、岡田莊司『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会、一九九四年の第六章「二十二社の成立と公祭祀」を参照。
- 3 『枕草子』二八七段、「神は松の尾。八幡、この国の帝にておはしましけむこそめでたけれ。行幸などに水葱の花の御輿にたてまつるなど、いとめでたし」とある。
- 4 松尾大社史料八四四号「酒由来之事」。
- 5 天野真志「近代松尾神社の広がり」(京都文化博物館編『特別展 みやこの西の守護神 松尾大社』京都文化博物館・朝日新聞社、二〇二四年)。
- 6 野村朋弘「松尾大社所蔵史料を読む」(渋谷綾子・天野真志編『古文書の科学 料紙を複眼的に分析する』文学通信、二〇一三年)。
- 7 松尾大社史料二号文書「弁官下文」。
- 8 松尾大社史料六号文書「六波羅探題御教書」。
- 9 松尾大社編『松尾大社』(松尾大社史料九〇号文書)、豊臣秀吉から社領を安堵されている(松尾大社史料八九号文書)。
- 10 松尾大社編『松尾大社』(学生社、二〇〇七年)。
- 11 松尾大社編『松尾大社』(学生社、二〇〇七年)。
- 12 清文堂出版、二〇〇四年、五島邦治『京都町共同体成立史の研究』岩田書院、二〇〇四年などが主要な研究としてあげられる。
- 13 松尾祭が勅祭と神幸祭・還幸祭とで構成されている点については、(一)の岡田莊司の研究のほか、京都文化博物館編『特別展 みやこの西の守護神 松尾大社』(京都文化博物館・朝日新聞社、二〇二四年)所収、野村朋弘「総論」を参照のこと。
- 14 野村朋弘「松尾祭再興についての基礎的研究」『京都造形芸術大学紀要 (GENESIS)』一九九号、二〇一五年。
- 15 松尾大社史料五号文書「弁官下文」。
- 16 野村朋弘「祭礼を維持するコミュニケーション」(宮信明編『対話により創作と継承』京都芸術大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎、二〇二五年)『柳田國男全集』一三、筑摩書房、一九九〇年。
- 17 植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼―山・鉾・屋台と囃子― 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 研究叢書①』岩田書院、二〇〇五年。
- 18 西山剛『輿をかつぐ人びと 駕輿丁・力者・輿昇の社会史』思文閣出版、二〇二四年。
- 19 中西仁『神輿昇きはどこからやってくるのか 京都にみる祭礼の歴史民俗学』昭和堂、二〇二四年。特に本稿及び今後の研究では本書が主要な先行研究となる。
- 20 山内隆『京の祭 民謡集』祭礼歌謡研究会、一九三四年。
- 21 (19) 同書参照。
- 22 (19) 同書一五二ページ参照。
- 23 (19) 同書一六三ページ参照。